

つくり物・置物・美術

日高 薫

Tsukurimono, Okimono and Art

- ① つくり物と美術史研究
- ② 「置物」の系譜
- ③ 座敷飾りにみる置物
- ④ 型物陶磁の流行
- ⑤ 越向と花瓶
- ⑥ 明治の置物とヨーロッパの置物
おわりに

【論文概要】

本稿は、つくり物と美術との関係を考えるにあたって重要な、有用性をもたない工芸品としての「置物」の歴史を概観する。

置物の系譜は、大きく二つの流れに集約できる。第一は、動物彫刻や人形のように、元来用途をもたず、純粹に装飾を目的として作られる立体物であり、第二は、香炉や香合、水滴、文鎮などのように、何らかの用途をもちながら、器物本来の機能的な形態を逸脱し、動物や他の器物の形象物として作られ装飾品として用いられたものである。これらの装飾的工芸品は、中世から近世にかけて大衆化する床飾りを中心とした室内装飾の中でアクセント的に飾られることにより、次第にその地位を確立していった。さらに近代になると、外貨獲得のための輸出用工芸品として脚光を浴びるようになり、新しい機能を与えられる。

つくり物は、祭礼や儀式のために製作され、特定の場で飾られた後は、壊される運

命にあつた。一方、置物は、非実用的な飾り物であるという点でつくり物と極めて近しい関係にありながら、壊されずにかたちを留めるという点では、つくり物と性格を大きく異にする。従来の美術史研究においては、つくり物同様、置物も研究対象として取り扱われることがまれであつたが、同時代の造形とそれを生み出す社会や文化をとらえるうえで、これらの造形物を研究することは無意味ではないだろう。